

米国の「核態勢見直し」(NPR)

	2010 年版	2018 年版
核兵器の役割	基本的な役割は、米国、同盟国およびパートナー国に対する核攻撃の抑止。	決定的な役割は、核・非核攻撃の抑止。同盟国およびパートナー国への保証の提供、 <u>抑止が失敗した場合の米国の目標の達成。</u>
核兵器の使用の検討	米国、同盟国、パートナー国の死活的に重要な利益を守るという究極的な状況においてのみ核兵器の使用を検討する。	米国、同盟国、パートナー国の死活的に重要な利益を守るという究極的な状況においてのみ核兵器の使用を検討する。 <u>究極的な状況には、非核による重大な戦略攻撃が含まれうる。</u>
核弾頭の開発	新しい核弾頭を開発しない。	<u>短期的には、低威力の潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM) の配備を進める。長期的には、核弾頭を搭載する海洋発射巡航ミサイル (SLCM) を求める。</u>
核・非核両用航空機 (DCA)	DCA を維持する。	DCA を維持し、 <u>必要に応じて強化する。核攻撃能力を有する F35 戦闘機に DCA としての任務を付与する。</u>
包括的核実験禁止条約 (CTBT)	批准および発効を追求する。	米上院による <u>批准を求めない。</u>

(出典) 米国防総省「核態勢見直し」(NPR) 2018 年版、2010 年版等にもとづいて作成

外交防衛委員会 2018 年 3 月 20 日 日本共産党 井上哲士 提出資料

ジョン・フォスター諮問委員会委員の議会証言より(米上院軍事委員会 2009 年 5 月 7 日公聴会)

「(…)われわれは、われわれに意見や特に懸念を示したたくさんの国々のコメントを聞く機会をもった。ロシアの周辺の同盟国及び中国の周辺の同盟国は懸念している。それらの同盟国が潜在的な敵からの表明に対して、核の傘が信頼できるものになるかどうかについて懸念している。

特に、日本の代表は、米国の核の傘としてどんな能力を保有すべきと彼らが考えているかについて、ある程度まで詳細に説明した。その能力とは、ステルス性があり、透明性があり、迅速であること。そして最小限の副次的被害で堅固な標的に浸透できる能力や小型核爆弾などを望んだ。(…)」

(出典) 米議会公聴会記録等にもとづき作成

外交防衛委員会 2018 年 3 月 20 日 日本共産党 井上哲士 提出資料

秋葉剛男公使の話(憂慮する科学者同盟レポートより)

(…)NPR の議論における日本の主要な人物は、ペリー＝シュレジンジャー報告書における日本の政治担当官 4 人のうちのひとり、秋葉剛男氏だった。同氏は現在、NPR の後に始まった日米拡大抑止対話の日本側のディレクターを務める。秋葉氏が憂慮する科学者同盟(UCS)に話したところによれば、同氏の考えでは、日本にとって唯一の効果的な核抑止のオプションは、米国が冷戦期間中に独自の核兵器をもたないいくつかの NATO 同盟国に対して提供した「ニュークリア・シェアリング」の取り決めと同様の取り決めだ。ヨーロッパに置かれる米国の核兵器は平時には米国の管理下におかれたが、危機に際して管理は同盟国に引き渡される。これは、米国が同盟国を防護するために核兵器を使用することを嫌がった場合に生じるかもしれない潜在的な「デカップリング」問題を解決することによって抑止を増大させる方法だとみられていた。秋葉氏が UCS に話したところによれば、同氏は日本がヨーロッパのような取り決めを必要としていると考える。同氏の言葉で言えば、「中国及び北朝鮮は、使用を決定するのは米国の役目ではなく、日本の役目になることを知る必要がある」。(…)

(出典： 憂慮する科学者同盟(UCS)「日本及び米国の核態勢 改訂版」2013 年 11 月より)

外交防衛委員会 2018 年 3 月 20 日 日本共産党 井上哲士 提出資料